

書かれたものと書きえぬこと——歴史表象と死者の記憶——

1 「書かれたもの」と「書きえぬこと」

「書かれたものと書きえぬこと」という主題で当初、歴史叙述として書記化された過去と、歴史として書記化されない過去のたとえば民衆の記憶といったことが考えられ、したがって報告者としてもこのように考えられた主題に相応しい歴史家が予定されていた。しかしその予定されていた歴史家の承諾が残念ながらえられなかつたために、私にその報告の代役が廻ってきた。当然、そこからこの主題についての理解も私なりに変容されることになった。

「書かれたもの」として私は、書記化された歴史叙述を

子安 宣邦

も含めてのさまざまな歴史的な表象化ということを考えた。そこには過去の記憶をさまざまに歴史的に表象化する行為が含まれる。たとえばこれからのべるような「記念館・記念碑」の建立ということも、過去の記憶にかかわる重要な歴史的な表象化としての行為である。「書かれたもの」をそうとらえることから、歴史的な表象化のあり方を通して人々の歴史意識が問われることになる。「書きえぬこと」として私は、すでになされている歴史叙述や、あるいは既に人々に共通にもたれている歴史表象が蔽い隠しているような過去の記憶、あるいは歴史的表象化の限界がいわれるような過去の記憶ということを考えたい。現代史において問われるそのような「過去の記憶」とは、向うからやって

きた戦争の道連れとされてしまった大量の死者・犠牲者についての記憶であると私は考えている。それは現代史における歴史的表象化を根底から問い返すような「過去の記憶」である。そこから、与えられた主題「書かれたもの」と書きえぬこと」は、私にとつては「歴史表象と死者の記憶」という課題としてあることになる。

## 2 「記念館・記念碑」と歴史表象

多くの異論と疑念をはらみながらも「戦没者追悼平和祈念館」建設案なるものが存在し、その実現がはかられつつあることは周知のことであろう。ここで留意すべきことは、日本国民の戦没者への追悼の意がその建設趣意で強く語られようと、しかしこの「平和祈念館」の構想自体が国民における歴史意識の亀裂を露呈させ、その亀裂の上に立って推進され、さらにその建設は亀裂をいつそう深めるだろうということである。そしてまたこの「平和祈念館」構想とは、戦争による死者・犠牲者の記憶を国家的な新たな歴史表象のうちに結晶させようという、国家的立場からの過去の記憶の歴史表象化の行為であるわけだが、しかしその「国家的立場」とは、日本の戦争行為の修正主義的に再歴史化することに執着するものによってかたられたものであるの

だ。第二次大戦以降、もはや戦争をめぐる「記念館」「記念行為」は、国民の集合的記憶としての歴史表象を一つにすぎとめるものではないのである。もとより、国民の歴史表象を一つにすぎとめるために戦争の「記念館」「記念行事」はあるのだし、現にそういうものとしてあったということをも十分に理解した上で私はそういつているのである。

ここからいくつかの問題が明らかにされよう。まず「記念館・記念碑」の建設とは、ある集団の過去の記憶を顕彰し、集合的記憶として刻印する歴史的表象化の行為であることだ。したがって国家行為としての戦争による戦没者を追悼する「記(祈)念館・記(祈)念碑」の建立とは、戦争による死者の記憶の国家による歴史的表象化の行為だということである。しかもそうした歴史的な表象化の行為はいまや、国民の戦争についての集合的記憶を一つの歴史表象に結ばせることを強く意図しながらも、むしろ国民における歴史意識の分裂を露呈させ、かえってその分裂を促進させてしまっているということである。それは「英霊」という名に収まらない、あるいは収められることを拒絶する大量の死者たちが存在するということであり、その死者たちの記憶に強くつながる人々が存在するということである。

戦争をめぐる「記念館」的行事が、国民の集合的記憶としての歴史表象についての争い、あるいは正当化された歴

史表象についての防衛的な抗議行動を呼び起こした最新の重要な事例として、スミソニアン航空宇宙博物館での「原爆展」の問題があることを私たちは知っている。当初の「原爆展」の展示計画が、アメリカの旧軍人たちの保持する正当な戦争行為という歴史表象を危機的にゆるがすものであり、そこからいわば彼らの歴史表象の防衛のための抗議運動が展開されたことを米山リサが論じている<sup>2)</sup>。米山のこの示唆に富む貴重な論文は、戦争における死者の記憶をめぐる歴史表象と国家的な境界との問題を重要な主題としたものだが、私は戦争をめぐる記念館的展示が、その歴史表象化行為をめぐる反発や抗議、そして既存の歴史表象の防衛を呼び起こすものとしてある重要な事例報告としていまは受け取った。

ところで戦争とその犠牲者、死者の「記念館・記念碑」という歴史的表象化の問題を、現代史における問題としてもっとも重い形で私たちに突きつけているのはナチズムの犠牲者の記念館であり、ヒロシマの犠牲者の記念館・記念碑であるだろう。

### 3 ダッハウとヒロシマの記念館

この夏、私はミュンヘン郊外にあるダッハウ強制収容所

の跡地を訪ねた。そこでアウシュヴィッツではなくダッハウの名がここに出てくることになるのだが、その跡地は記念遺跡として整備され、その主な建物は記念博物館（正式名称は「ダッハウ強制収容所追悼祈念資料館」として維持されていた。それは、「SSの「秩序」が最初に全面的に実現された<sup>3)</sup>」といわれるこの収容所のあり方をいまに残すかと思われようなく整備された記念跡であった。

ダッハウの記念博物館の入口ホールには、ナチ支配下の中部ヨーロッパに広がる強制収容所とユダヤ人の絶滅収容所施設を示す大きなパネルと被収容者・犠牲者の国籍を地図上に示すパネルが置かれている。それらに始まる写真や記録類による展示をつらぬくのは明らかにナチズムの加害の視点である。ドイツにおけるナチズムの台頭とその権力樹立の過程、ナチ政権樹立後の動き、政治的・人種的迫害と強制収容施設の設定、最終処理の決定と絶滅収容所の設立と絶滅の実行過程が、ダッハウ強制収容所の実情・実態を示す写真や記録、遺品の展示に先立って展示物によって解説されている。ここに見出されるのは、実地・実物を背景にして書かれた現代史の歴史教科書だということができる。戦争の記念館というものが、現代史の歴史的な表象化行為であることを端的にそれは示している。

ダッハウの記念博物館の展示物をつらぬくのは、加害の

主体としてのナチズムへの追求の視点であり、反ファシズムと解放の戦いとしての第二次大戦という史観である。したがってここには「反ナチズム」を原則とする戦後西ドイツの憲法的体制がはつきりと具現化されているといえる。あの「決して二度と再び」という跡地に立つ碑銘は、繰り返すことの決して許されないナチズムという重大な加害の歴史に向けられている。

「決して二度と再び」という碑銘といえは、私たちは当然ヒロシマを思わざるをえない。「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という広島市の平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑に刻まれた生者の誓いの言葉は、やはり繰り返すことを許さない重大な過去の事態に向けられている。だが、そこで誓われている繰り返さない「過ち」とは誰れによるどのような過ちなのか。慰霊碑の傍らにある建立趣意を説いた碑には、「碑文はすべての人びとが 原爆犠牲者の冥福を祈り 戦争という過ちを繰り返さないことを誓う言葉」だとある。原爆の犠牲者に向けて、すべての人が「戦争という過ちを繰り返さない」ことを誓うという、人類の平和の祈念ということに「過ち」の所在もその主体の問題も何もかも解消させてしまったようなこの碑文を前にして、私はもやもやとした思いをいだかざるをえなかった。

平和公園内の「原爆犠牲者追悼祈念資料館」ならぬ「広島平和記念資料館」で、私たちは原爆による被害の実情についての直接的な展示を見先に先立ってなされている導入的な、解説的な展示を見ることになる。最初のホールにある原爆投下直後の壊滅した広島市街とそれ以前の市街のありさまを示すパノラマ模型が、この資料館の展示をつらぬく立場をものがたっているようだ。それはこの広島における原爆の被害に、すべての関心が集約されるような展示の立場といていい。原爆による壊滅にいたる前史的な展示は、広島市の近現代史といえるものである。すなわち近世の広島藩の城下町から始まって、近代の広島市の発足、やがて軍都広島への発展、そして戦争と原爆による壊滅、戦後の復興に至る展示である。その間に、広島への原爆投下に至るアメリカでの決定過程、その決定をめぐる国際環境が説明され、エノラ・ゲイによる原爆投下の映像が繰り返し映される。記念館の展示は、それが過去の記憶の歴史的表象であることからそこにある歴史的ナラティブをとまなうが、しかしこの「平和記念資料館」の展示をつらぬくナラティブは、「人類の平和への祈念」をいうにはあまりにローカルでありすぎる<sup>4</sup>。八月六日が「ヒロシマ」を象徴的な都市名として掲げてなされる世界の反核的な抗議の日としてあることを思えば、ヒロシマをローカルな広島に局限するこの

展示の背景にある思想は、私には犯罪的であるとさえ思われる。ここには戦争をもたらし、戦争の終結を遅らせ、無残にして大量の死を国内外にもたらした日本の軍部と戦前・戦時権力への告発も追求もない。また他方、核兵器を開発し、使用し、そしてなおその開発と独占的保持とを基本戦略としているような大国による国際政治への批判的分析と告発とを、ここをセンターとして展開させねばならぬという責任の自覚もない。それはまさしくあの慰霊碑の「過ちは繰返しません」という、誰れのいかなる過ちかを隠蔽したあのあいまいな「誓い」に、重大な過去をめぐる生者のかかわりのいつさいを解消させてしまっていることからくることであろう。

#### 4 「記念碑的歴史」とは

ダッハウの「犠牲者祈念資料館」と広島市の「平和記念資料館」との対比によって浮び上がる重い過去の記憶を表象化する立場の差異によって私は、日本人の「被害者意識」に偏る戦争と現代史への反省的立場という、すでにいい古された自己批判的な言辞をここで繰り返そうとは思わない。しかしあえてこの「被害者意識」ということをめぐってあらためて問われることがあるするならば、それは「唯一の

被爆国」という自己表象に、戦争という過去にかかわる日本人の歴史表象を統一させてきた、そのことであるだろう。この歴史表象に国民の集会的記憶を統一させることによつて見えなくさせてしまったものは何か、あるいは隠されてしまったものは何か、さらには自らを欺いてしまったものは何かということである。だがここではそれらの問い直しには入らない。むしろ私がここで問おうとしているのは、「加害」の視点にしる「被害」の立場にしる歴史的なナラティブをともなつて、すなわち重い過去の記憶をめぐる歴史の表象化をともなつてダッハウにしても広島にしても、そこに記念館・記念碑が存在しているということである。しかもダッハウにしる広島にしるそこにある記念館とは、繰り返すことは許されない過去にかかわる記念館であるのだ。

「決して二度と再び」とは、ダッハウにしる広島にしる、その死と犠牲とを歴史にどのようにも収めようもない人々の霊に生き残った者の捧げた言葉であった。ところで、この「繰り返しません」という誓いの言葉とともに記念碑が建立され、記念館が設立されるということは、かつてありえたことなのだろうか。たとえそれが祈念碑・祈念資料館と犠牲者への追悼の意をこめて称されたとしても。この繰り返すことを許されない過去への思いをこめての記念碑・

記念館の建立ということは、かつてありえたことなのだろうか。そのような記念碑・記念館の存在は、そもそも過去の記念碑的なかかわりということと撞着するような事態ではないのか。

ニーチェが「生に対する歴史の利害」<sup>(5)</sup>について考察するなかで、三種の歴史的態度、歴史表象のあり方をあげて語っている。一つは「記念碑的歴史」という典型としての過去の事例への模倣とその再現をうながすような歴史的態度である。二つ目はニーチェが「骨重的歴史」という過去の尚古的崇敬感をもった歴史的態度である。第三は「批判的歴史」という「過去を法廷に引き出して手厳しく審問し、最後に有罪を宣告する」ような歴史的態度である。いま過去の記憶の歴史表象のあり方を問うている私たちにとって、歴史の表象行為とは生者の営みとして何であるかを問うニーチェの歴史への言及は多くの示唆を与えるものである。たとえば過去との連続性への執着を、「骨重的歴史」の態度を敷衍しながら語るニーチェの言葉の何と正確なことか。

「新しいものを求めることは正反対の感覚、すなわち樹木がその根に抱く満足感、自己を全く恣意的に偶然的に知るのではなく、過去に基づいて後継者として、花として、実として生い立ち、このことによって自己の現実存在が弁護、いな義認されるといふ幸福感、こ

れこそ今や人々が好んで本来の歴史的感觉と言いつているところのものである。」

近代国民国家の自己同一性を形成するように人々に求められ、人々の意識に植え付けられていった歴史的意识とはこのようなものであるだろう。そしてこの過去との連続性という自己表象のなかで戦死者の記憶も甦らされてきたのである。しかしいま私がここで重要な示唆をえているのは、「記念碑的歴史」についてのニーチェの言及からである。

「しからば過去の記念碑的考察、以前の時代の古典的なものと稀有なものに携ることが何によって現代人に役立つのか？ 現代人はそのことから、かつて現存した偉大なものがとにかく一度は可能であったのであり、それゆえまたおそらくもう一度可能であろうといふことを推察する。……模倣することができて再びもう一度可能なものとして記述されなくてはならない限り、過去はいくらかずらされ、より美しいものに解釈しなおされ、こうして自由な創作に近づく危機を免れがたいであろう。じっさい、記念碑的過去と神話的虚構とを全然区別することのできない時代がある。」

ニーチェはここで過去の記念碑的考察とは、記念碑的な事例として過去を美化しながら、それが模倣的にもう一度可能なものとして過去を歴史的に表象することだといつて

いるのである。記念碑あるいは記念館の建立の背後にあるのは、このような過去の事例の模倣的な再現を期待しながら過去を美化しつつ、あるいは神話化しながら表象する歴史観であろう。そして戦争における戦死者の記念碑の建立は、近代国民国家の成立とともに、戦死者の犠牲的行為の国家による顕彰——英霊という国家的犠牲者の霊一般への祀り上げ——とその犠牲的行為の国民におけるたゞざる再現の期待とをもってなされたし、なされてきたのである。この碑前で祈念されるのは、「繰り返しません」という歴史の断絶の誓いではない。国家の礎となった死者の遺志の継続と己れにおけるその犠牲的行為の再現の誓いである。「繰り返しません」という誓いととも死者の記念碑・記念館のあることの意味を、ダッハウについても広島についても、またこの戦争の犠牲者の多くの記念館について、もう一度私たちは考え直さねばならない。

## 5 「負の遺産」としての過去の歴史表象化

アウシュヴィッツをめぐる「表象の限界」ということが論じられた<sup>6</sup>。それは「最終解決」についてのスキャンダラスな解釈の登場、あるいはナチスによるユダヤ人絶滅計画とその実行をドイツ現代史に再歴史化することをめぐつ

てのいわゆる「歴史家論争」<sup>7</sup>の展開、そしてホロコーストのさまざまな映像化をめぐつての問題などを通じて論じられた。私はいま、アウシュヴィッツをめぐるそこで問われているのは、その限界ということを含めて、歴史的に表象化すること、そのこと自体の意味だと考える。ナチスによるユダヤ人絶滅計画とその実行をドイツ現代史に再歴史化することの歴史修正主義的な要求がなされる背景にある「歴史への関心」について、ユルゲン・コツカはこう説明している。

「期待されているのは、アイデンティティー創出の手助けであり、また意味創出への寄与でさえある。望まれているのは、「同意可能な過去」であり、集団的なアイデンティティーの強化とコンセンサス形成のための伝統としての歴史である<sup>8</sup>。」

「負」の価値をもってしか見られていない過去の修正主義的な再歴史化とは、「同意可能な過去」としての再歴史化の要求、いかえればドイツの集団的アイデンティティーの肯定的な再形成の要求にかかわってなされるのである。だから「歴史家論争」を論評しながらドミニク・ラカプラも、ドイツの歴史修正主義的見解の登場の背後にネオ・ナシヨナリストたちの再起の徴候を見ながらこういうのである。「この徴候が目立つのは、現在のドイツの「積

極的」あるいは肯定的なアイデンティティを提供するためにナチスの過去を書き換えようと望んでいる保守勢力の側なの」だと。いずれにしろ自国の過去の再歴史化の要求は、国家の集団的アイデンティティの再強化ないし肯定的な再形成の要求とともにあるのだということを確認しておこう。そのことは、ある集団における重大な過去の事態をめぐる歴史的な再表象化は、その集団のアイデンティティの何らかの再形成にかかわることである。

ところでいま私が問題にしているのは、ある集団にとっての過去の事態がその集団にとつてまったく「負の遺産」であるような事態の、その歴史的表象化の問題である。「繰り返しませせん」とは、その集団にとつての過去の事態を「正の遺産」としてでは継承しないことの決意ではないか。それは「負の遺産」として過去を負い続けることの決意といってもいい。ところで過去を「正の遺産」として継承するということは、集団のアイデンティティの再形成のなかで過去が意味をもつということである。それは歴史的再表象化の作業において過去が意味ある一頁を形成することだといいかえてもよい。意味ある一頁を形成することで建立されたのである。ここから、現代史における再歴史化を要求する歴史修正主義とは、過去のもつ「負」の価値

を漂白させながら、己れの集団にとってのそれなりの意味を過去からあえて読み取ろうとすることだということになる。

ところでアウシュヴィッツの死者たちは、どこにも、どのようににもその死の意味を見出すことはできない。それこそ「表象の限界」ということの本質的な意味であるだろう。その死は、歴史的表象化の作業によって意味ある位置を見出すことはないのだ。あるいはその死は、ある歴史的ナラティヴに収められて、再び語り出されることを拒絶しているのだ。だが、どこにも意味を見出すことのできない死者たちとは、集団の外に、集団のはるかな見捨てられた底部に、歴史を通じてたえず存在してきたし、そして第二次大戦はそのような死者を世界各地で大量にもたらしたのではない。広島もそうだ。沖縄もそうだ。そして日本の軍隊によって中国をはじめアジア各地で惨殺された数えきれない民衆たち、あるいは空爆下に死んだ無数の住民たち<sup>10</sup>。彼らはどこにどのようの意味を見出しうるのか。記念碑・記念館の建立という国家の、あるいは集団の歴史的表象化の作業に決して収めることのできない、いや、収められることを拒絶する無数の死者たちがいるのである。現代史における歴史表象のあり方を本質的に問うているのはそうした死者たちの記憶である。

そのような死者・犠牲者の記念碑とは「負」の記念碑である。記念碑というものが、その集団の過去の「正の遺産」としての継承とその再現への期待のうちに建立されるものとすれば、「負」の記念碑とは、死者たちが歴史に収められることの拒絶を遺志として受け取りながら、過去の「正の遺産」としての継承とその再現を拒絶することの意志とともに建立されるものであるだろう。だから「繰り返しませんが」とは、「負」の記念碑の碑銘であるはずだ。さらにいえば「繰り返しませんが」とは、過去の再歴史化の対極にある「負」の歴史的表象化の意志の表現であるはずである。

まさしく現代史の課題として問われているのは、「負の遺産」としての過去の歴史的表象化である。それは、過去の記憶を境界線に縁どられた歴史表象に結びつけてきた、あるいは「われわれ」の記憶という一つの歴史表象に結びつけてきたあらゆる表象化の作業を疑い、その作業を支える思想をゆるがし、その歴史表象によって隠され蔽われてきたものをあらわにし、過去を集団的境界線とともに語ってきた歴史のナラティブを根底から危うくするようなものであるだろう。<sup>11)</sup>

## 註

(1) 戦没者の霊を「英霊」と称するようになったのは日露

戦争後である。村上重良はその事態をめぐって、「戦没者の霊は、これまで忠魂、忠霊とよばれてきたが、日露戦争を境に、より個性のうすい抽象的な英霊というよびかたが一般的となった」(『慰霊と招魂―靖国の思想―岩波新書、一九七四)といっている。このことに連関して、戦没者の墓の集合体として戦没者墓地在、国民の崇敬の対象として出現するのが第一次大戦後であることに注意される。このことは近代戦が、未曾有の戦没者をもたらすことと深く関係する。日露戦争における一年四か月の戦闘は、八万八千四百人の戦死者をもたらした。この戦死者の数と一般的「英霊」としての近代日本国家による祈りあげとは密接に関連する。そして戦没者墓地在が「大衆文化的様相を帯びながら出現する」ことは、「最初の総力戦として戦場における大量死がひきおこされるようになった第一次大戦から」(荒井信一編『戦争博物館』岩波ブックス、一九九四)であるといわれている。そして、第二次大戦は「英霊」ともよばれない大量の死者・犠牲者をもたらしたのである。この死者に連なる記憶は近代国家のあり方を本質的に問い返す視点である。

(2) 米山りさ「越境する戦争の記憶」『世界』一九九五・一〇、岩波書店。米山はそこで「原爆展への反対は、彼らの記憶の国境と共感の境界線を侵犯されまいとする、必死の抵抗だったのである」といっている。

(3) Ch・クロッコフ『死の沈黙―ドイツ強制収容所跡写真集』解説、大月書店、一九九五。

(4) 「平和記念資料館」で販売している図書に広島平和文

化センターの刊行になる「ヒロシマ読本」という刊行物がある。その第一号（「平和図書」第一号、一九七八初版、一九九四第一六版）は、「資料館」の展示をさらに詳細にした郷土史からなっている。

(5) ニーチェ「生に対する歴史の利害について」『反時代的考察』（ニーチェ全集4）小倉志祥訳、ちくま学芸文庫。

(6) ソール・フリードランダー『アウシュヴィツと表象の限界』上村・小沢・岩崎訳、未来社、一九九四。

(7) ハーバマス、ノルテ他『過ぎ去ろうとしない過去―ナチズムとドイツ歴史家論争』徳永・三島他訳、人文書院、一九九五。

(8) ユルゲン・コツカ「ヒトラーの記憶は、スターリンとポル・ポトを持ち出すことで抑圧されてはならない」、前掲『過ぎ去ろうとしない過去』所収。

(9) ドミニク・ラカブラ「ホロコーストを表象する―歴史家論争の省察」、前掲『アウシュヴィツと表象の限界』所収。

(10) これらの死者たちとは本質的に数えられない死者たちである。それを数え上げる行為が、すでにその死者たちの記憶の歴史的表象化であり、その歴史表象をめぐる争いを引き起こしていることを見るべきだろう。

(11) さきに挙げた米山「越境する戦争の記憶」で「原爆展」をめぐる対立について、「前者が従来の国家の記憶の領域を侵されまいと試みたのに対し、後者がその集合的記憶と共感の境界線に挑もうとした、その違いであった。言い換えるなら、スミソニアン論争は、これまで自前と思われて

いた歴史の常識がはたしてそうなのか、という批判的・探究的知を求める人々と、誰が敵で、誰が何のために戦った戦争だったのかという明確な指示対象の輪郭が問われることで、過去を知るさいに手がかりとなる安定したカテゴリーが曖昧にされることへの不安を抱く人々の動揺とのせめぎあいであった」と論じていることは、「負」としての過去の歴史的表象化をめぐる私の考察にも貴重な示唆を与えている。

（筑波女子大学教授）